家族や身近な人との関係を見つめ直し、
人権や差別について話し合う機会を持ちましょう。

人権作文

神楽がつなぐもの

波野中学校2年
佐藤　大地

神楽を舞うこと。それは私にとって、なくてはならないものだ。なぜなら神楽はこの波野に根ざした文化であり、私の人生に大きく関わってきたものだからだ。

私が神楽と出会ったのは、保育園の頃だった。家のすぐ近所にある神楽殿で行われる父と祖父の公演に何となくついていき、いつも舞台の袖から神楽を舞う二人の姿を見ていた。はじめは、神楽に登場する人物の『面』がとても恐ろしかった。しかし祖父が、夜通しで神楽の演目を三十三座すべて舞い続けた公演のビデオを見てその気持ちは変わった。ビデオを見るまでは正直、（本当に夜通しで舞ったのかな）と半信半疑だった。しかしビデオを見ているうちに「神楽って、すごい迫力だな。」と、衝撃を受けている自分がいた。それに、誰もやったことがないことに挑戦して成功させた祖父を「かっこいい」と思った。いつしか『面』の恐怖を忘れて、自分も神楽を舞いたいと思うようになっていった。

そして、小学校二年生の時に初めて神楽を舞った。「神楽を舞いたい」と家族に打ち明けた時の祖父の嬉しそうな表情は忘れられない。最初に舞ったのは「五方礼始」という舞だ。実際に舞ってみると、とても緊張してしまい、舞うことの大変さがわかった。『面』をつけ始めるとさらに大変さが増した。視界は狭くなり、衣装は重く動きにくかった。しかし、神楽をやめたいと思ったことはない。神楽を好きな気持ちが強く、私にとって神楽は、やるのが当たり前なものになっていた。

中学生になった私に、新たな挑戦の話が来た。それは、「ダンスチームと神楽をコラボしないか」という誘いだった。初めてこの話を聞いたとき、正直私は「何を言っているんだろう」と思った。それは神楽とダンスが一緒に同じ舞台に立つなんて考えられなかったからだ。

私はいつもの神楽じゃない神楽を舞うことに不安ばかり感じていた。しかしそんな私に相手ダンスチームの方がていねいにアドバイスをしてくださり不安を取り除いてくれた。また、同じ舞台に立つ父や祖父、そして仲間の存在が私の大きな支えになった。

舞台が終わり、幕が降りると外の音は何も聞こえなくなった。しかし、後からスタッフの人に「幕が降りた後も、拍手が鳴りやまなかったよ。」と聞き、うれしくてたまらなかった。さらにその後、家族から波野中の友達や先生方も来てくれていたと聞き、とてもありがたい気持ちになった。

この公演で、私は、周りの人たちの支えがあるからこそ、神楽ができるのだと改めて気づかされた。「支え合っての神楽」だと強く感じ、こうして今、自分が神楽を舞うことができることに感謝している。

また、公演を無事に終えた達成感と、ダンスという現代の表現と神楽という伝統文化が混ざり合うという、新たな分野を切り拓くことができた喜びが、私に大きな自信を与えてくれた。私は勉強があまり得意ではなく、神楽がなかったら、自分に自信を持てなかったかもしれない。しかし、神楽を舞うことが自分の中の大きな自信につながっていると感じる。

それだけではない。私の家では、父も祖父も神楽を舞っている。公演の前日は、夕食の時などに「明日は落ち着いていけ」や「一つ一つの動作を大きく」などのアドバイスをしてくれる。祖母も「観客をかぼちゃだと思いなさい」などの言葉で勇気づけてくれる。それに母は夕食後、時には夜遅くに白衣や足袋にアイロンをきれいにかけてくれる。そんな母の姿を見ると（明日はがんばるぞ）と思う。なにより母がアイロンをかけてくれた衣装はぴしっとなっていて、とても舞いやすい。こんな家族の姿が公演前の習慣になっていて、なんだかとてもいいなぁと思う。神楽は私の家族をつなぐものでもあるのだ。

神楽は私にとって、なくてはならないものだ。だからこそ、私にはしなければならないことがある。それを今回のダンスチームとの共演で、学ばせてもらった。相手ダンスチームの方々は、神楽の定期公演に東京から何度も足を運び、古事記などをもとに、神楽の勉強もたくさんされていた。一つのことを、目標を持って達成するという、舞台に対する熱い思いは、神楽だけではなく、ダンスにもあることに気づかされた。それと同時に、神楽を舞う自分たちも、もっと神楽を広めていくために考えていかねばならないと感じた。

私はこの中江岩戸神楽を、一人でも多くの人に知ってもらいたい、見てもらいたいと思っている。それは、中江岩戸神楽は、世界に一つしかない伝統芸能であり、この土地の宝だと思っているからだ。しかし、現在は少子高齢化によって神楽を舞う人が減りつつあり、伝統が途絶える危機に直面している。昔の人たちが大切につないできたこの宝をなくしてしまうのはいけないことだと私は思う。

私は今、中学生だ。しかし、それだからこそできることがあると思う。私たちが努力し続けることで、全国から神楽の依頼が来るかもしれない。たくさんの依頼が来るように、私はもっと必死に頑張りたい。そして、これまで祖父から父へと受け継がれてきた、波野の中江岩戸神楽の伝統を、私も受け継いでいきたい。

先生からのコメント

この作文は、波野の中江岩戸神楽の伝統を受け継ぐことに関して、文化祭で意見発表の時に書いた意見文を改めてつづり直したものです。大地くんは、勉強と部活で忙しい日常生活の合間をぬって神楽の練習や公演を頑張っています。神楽の話になるといつも目を輝かせて語ってくれます。神楽に打ち込む姿は、学校のみんなや私に熱い心を呼び起こしてくれます。

人権作文　平成25年度　阿蘇市人権作文集「かけはし」より　※学年は平成25年度時点。

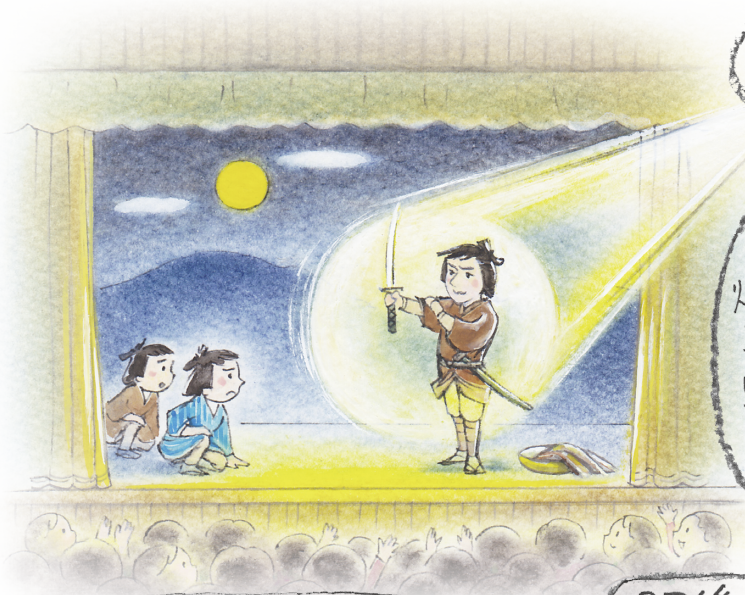
大事にしたい、懐かしい阿蘇の生活 No.32

「自然とともに遊び生活した子どもの頃の体験は宝物だ。心身を強くし、感性を豊かにする。阿蘇の大自然を守るためにも次代を担う若い人や子どもたちにもぜひ伝えたい！」と願い、あべさんが描かれた作品をお届けします。

阿蘇市在住。
絵や講演で活躍中。

絵・文　あべまりあ

旅回り一座



☆テレビも車も無かったあの頃…村々には色んな旅一座が訪れてくれて私たちを楽しませてくれていた。一座のお芝居や踊りを観たり、彼らの生活に触れたりすることはとても新鮮で、夢をふくらませてくれた。誰もがまだ貧しかったあの頃、でも、みんな懸命に生きて希望に燃えていた。

肥後にわか

「肥後にわか」の他にも小さな一座がいくつもあって旅をしながら村々で芝居をやってくれていた。

主役は♡お米(よね)ばあさん 熊本弁丸出しのウルトラばあさん。

どぎゃんもこぎゃんもなかたい!!

30代の男の人が演じてた

芝居もうまくて超おもしろかった!!

♪嫁入りしたこたしたばってん～

民謡「おてもやん」の歌の中で好きなとこ

♪あとはどうなときゃあなろたい～

♡なるようになるさ、という意味。

☆村中の人が見にくるので、空地に舞台を作って村の一大イベントになっていた。

☆ちょうど村に公民館も建ち始めた頃だ。

芝居のあい間に踊りがあって

♡あごをクッと回して流し目が決まると拍手かっさい!! おひねりがいっぱい飛んできた。

いよ～っ日本一！

ぴ～っぴ～っ

もちろんさっちゃんの踊りにはみんなうっとり…大喜びだった

♡旅回り一座が村々を回る間一座の娘と友だちになった。

夜、さっちゃんはお化粧をしてきれ～いに着飾って踊ったり芝居に出たりしていたのだ。

10日程で次の町へ行ってしまったがさっちゃんのことを思い出すと今もなぜか涙が出てくる。

♡公民館ができる前、実は父が家を解放して我が家で巡回映画を年に3～4回ほどやっていたのだ。(5～6年間)

なので♡美空ひばりや大川橋蔵の時代劇はい～っぱい見ていた。

やがてテレビが出現して…巡回映画のおじさんたちも来なくなった…。

あっという間に50～60年も経ってしまったが、今こそ人と人とが直に関わって、表現する喜び、それを受けとめる楽しさなどもっと氣楽な感じであってもいいのかも♡と思う。